（第3種郵便物認可）

愛和会 保育対談

コロナ禍の現場と地域で

子どもたちを見守る責任 笑顔で選ばれる園づくりを

コロナ禍は人々の生活にさまざまな影響を及ぼした。保育は子育て世代の働く女性にとってはもちろん、地域社会にとっても欠かせないエッセンシャルワークだが、感染拡大を防止するために、現場の保育士たちは非常な努力と苦労を余儀なくされた。そのような状況下で、保育士たちはいかに子ども達に接し、悩み、地域の人々に支えられつつ職責を全うしているのだろうか。プロ意識と精神性を持って現場と地域の日常を最前線で支え続ける保育士の奮闘を、愛和会こどもの森　阪手保育園園長の阪本善美さんと、朝和保育園保育士の吉本彩希さんに語り合っていただいた。

こどもの森　阪手保育園
園長　阪本 善美 さん

愛和会とは

―愛和会についてうかがいたいと思います。

阪本　愛和会は天理市、田原本町、川西町で保育園等の設置と運営をしています。創立は昭和54年で、保育園5、認定こども園1、小規模保育事業所1の7つの保育施設を有しており、職員230人体制で約1000人の子どもを預かっています。各保育施設はそれぞれ特色がありますが、たくましくしっかりした子、心身共に健やかな子を育てることを全職員が共有しています。保育園では一人ひとりを大切にし、こども一人ひとりの心に寄り添っていくことを大切にしています。

保育の仕事は、人との触れ合いが基本ですし、子どもはみんな個性があります。また家庭環境が異なりますので、子どもたちだけでなく保護者一人ひとりにも寄り添う気持ちを大切にしていくことを職員に伝えています。

コロナ禍のもとで

―コロナ感染症の拡大に伴い、どのようなご苦労がありましたか。

阪本　1年前は、このようなことになるなど想像もしていませんでした。生活様式も変わり様々なことが保育園生活にも影響し、不安が募り、今日一日無事に過ごせることを毎日祈るばかりでした。保育中は「密」を避けることが難しいので本当に色々と悩みました。

まずは子ども達の健康・安全を第一に、看護師と話し合いを重ねて試行錯誤しながらコロナ対策に努めてきました。

一番困ったのは、マスクや消毒液の入手が困難だった時期です。そんな時に、保護者の方が朝早くから薬局に並ぶなどして入手したり手作りのマスクを寄贈したりしてくださいました。

また、保護者の方々から温かい励ましの言葉をかけていただき、それが非常に励みになって、頑張ってこれました。あの時のことはいま思い出しても胸が熱くなります。

吉本　子どもたちが楽しみにしている行事が次々となくなっていって、とても寂しく悲しい思いをしました。日常の保育でも、マスクをしていますからお互いに顔の表情が分かりません。その状態で気持ちを出して伝えることは、たいへん難しと思いました。いまは慣れましたが、最初のころは本当に大変でした。

保育士という職業

―保育士を志望された動機は何ですか。

吉本　3歳の時の担任の保育士の先生がとても好きで、憧れていました。私が病気やけがをした時に寄り添ってくださって、とても素敵な先生でした。それで私もその先生のような保育士になりたいと思いました。ちなみにその先生とは、今でも年賀状を交換しています。

朝和保育園
保育士　吉本 彩希 さん

子どもの言葉に耳傾け 子ども、保護者との信頼構築へ

―いいお話ですね。どのように思われますか。

阪本　本当にそう思います。子どもたちは自分の気持ちを、いろいろな形で表します。言葉だけではなく泣いたり、怒ったり、笑ったり、何でもいいのですが表現できる雰囲気を作ることが大切です。それによって子どもたちは、自分が受け入れられているのだと感じ安心します。そのような雰囲気を作るのが保育士にとって大切ですし、職員に常に言っています。自分の気持ちを押し付けずに、まずは受け入れ寄り添うことが大切だと感じています。

吉本　子どもの気持ち、子どもの言葉に耳を傾けることが大切です。子ども同士がけんかした時は、両方の話を聞きます。そうすることで、子どもたちは「自分の気持ちを分かってくれる」と感じるようになります。

―信頼関係が大切ということでしょうか。

阪本　はい。お互いの気持ちを受け入れていくことが信頼関係をつくることにつながります。これは子どもに対してだけではなく、保護者に対しても必要です。それによって、子どもを受け入れてもらっていることへの安心感が出てきます。

―今までどのような保育をしてこられましたか。

吉本　保育士として4年目です。最初は1歳児を2年間担当し、2歳児のクラスを経て今は0歳児の担任で18人の子どもを8人の保育士で担当しています。複数担任制なので単に人員的なものだけではなく、分からない時や困った時は相談しお互いに助け合って保育をすすめています。

0歳児の成長は著しく、その成長を毎日肌で感じることができて、とても充実感があります。今日はハイハイしたとか子どもの成長を保護者の方と共有できることがうれしいです。

阪本　それは職員にとって、本当に喜びだと思います。子ども達にルールや約束ごとを知らせる時も保護者と共通理解をしてすすめていくよう心掛けています。丁寧に関わることで保護者の気持ちも分かるようになり、心のつながりを深めることができます。そのつながりが在園中だけでなく卒園してからも続き、保育園を訪ねて来られる保護者もおられるのでうれしく思っています。

明日に向かって

―最初にコロナ禍での保育士さんのご苦労についてうかがいましたが、これを踏まえて今後についてうかがいたいと思います。

吉本　子どもたちがどうしたら楽しく過ごせるかということで、ずいぶんと悩みました。今までとは違う保育を考えなければならず、全体では集まれないので、子どもたちをグループに分けて遊ぶなどクラスごとにさまざまな新しい取り組みをしました。

阪本　運動会や発表会などの行事も例年通りにはいきませんが保護者の方々のご理解とご協力のもと、できる限りの工夫と配慮をし、実施に至ることができました。これからも創意工夫して楽しい保育をすすめていきたいと思います。

少子高齢化で児童数は減少していますが、ニーズは増えていますし、保育への期待も高まっています。つまり少子化は進んでいるけれども入園希望者は多いのです。大事なことは保護者の方々に大切なお子様を安心して預けていただける保育園を作っていくことです。子どもたちとの和　保護者との和　地域の方々との和をしっかりと広げ一人ひとりを大切に思う「あふれる愛とおおきな和」を持って今後も子どもたちや保護者の方々に寄り添い歩んでいきたいと考えています。

保育士の仕事は、子どもたちの命を預かり、成長を見守っていく責任のある仕事です。その仕事に誇りを持って、職員みんなが楽しく、生き生きと保育できるように「みんな、笑っていこうね！」と私自身も心がけ、職員にもそのように言葉をかけるようにしています。

この大変な時だからこそ心をひとつに、みんなで乗り切っていきたいと思います。

―大変な仕事の中にも明るい雰囲気づくりを心がけておられる姿に感動しました。本日はありがとうございました。